Faculty Development
INVITATION

山梨大学教育学部
第41号
March 22, 2024

2023年度のFD事業

ＦＤとはFaculty Developmentの略語で、その目的は教育活動の改善でありその手法を身につけることです。2023年度は、新採用教員事務研修会（ＦＤ研修会）（４月28日)、附属学校園での初任者研修、ＦＤ研修会（７月５日、９月６日、11月15日、１月31日)、教育学部ＦＤフォーラムおよび学生代表と学部長との懇談会（１月24日）を開催しました。中でも、教職員を対象としたＦＤ研修会は今年度４回実施しました。第１回は、精神障がい学生への合理的配慮を学ぶ機会としました。第２回は附属４校園との連携による教員養成・教育実践研究協議会の取組について理解するための機会としました。第３回はＳＤＧｓに関連する学校教育、大学教育の取組の現状や可能性について、教員養成における課題を考える機会としました。第４回は、初年次学校園体験活動の具体的な内容やそのねらいについての共通理解を図りました。教員養成をミッションとしている本学部において、いずれの研修会も学びの多いものとなりました。講師の先生方には深く感謝申し上げます。これからの本学部にとって何が必要かＦＤ活動を通して一緒に考えていき、より良い学部になればと願っております。

	開催日	題 目	講 師
第１回	7/5（水）	合理的配慮の必要な学生への支援のあり方について－精神障がい学生への合理的配慮－	学生サポートセンター 正木　啓子 先生
第２回	9/6（水）	附属４校園との連携による教員養成・教育実践研究協議会の取組	附属教育実践総合センター 中込　　司 先生
第３回	11/15（水）	教員養成学部で学ぶＳＤＧｓ	幼小発達教育講座 鴨川　明子 先生
第４回	R6 1/31（水）	初年次学校園体験活動について	幼小発達教育講座 高橋　英児 先生

FD委員会委員長　森長 久豊

2023年度教育学部FDフォーラム報告

１月24日（水）にＪ号館Ａ会議室にて、令和５年度「教育学部ＦＤフォーラム」及び「学生代表と学部長との懇談会」が共同開催されました。学生代表として、各コースや特別教育プログラム、教育実践創成専攻（教職大学院）の方々にご参加いただきました。教職員では、学部長、学系長、副学系長、関係各種委員会・部門の委員や代表者、支援課長、教務グループの方々にご出席いただきました。

本会の目的は、学生代表と学部長をはじめとする関係教職員が一堂に会して、教育学部・教職大学院の課題と今後について考えることです。まず、ＦＤフォーラムでは、「教育学部・教職大学院の現状と課題」をテーマとして、服部学部長より、下記の３つの観点からの説明がありました。

①「教員養成を大学で行っている」について

教員という仕事は専門性が高く、単にノウハウだけを身につければよい職業ではない。教員になってからもよりよい教育を自分の頭で問い続け、考え続けていかなくてはならないとても専門性の高い職業である。だからこそ大学という最高学府で教員を養成する意義がある。また、大学は研究の場でもある。大学教員は研究者である。学生は研究者の指導のもとで学び教員になる。そのため、問い続け、探り続けることを大事にしてほしい。

②「教育学部であり教職大学院で教員養成を行っている」について

教育学部・教職大学院で学んでいるという意義を、学生が実感できる学びを保障したい。教育学部は教員になるための学部のため、教員になるための科目がとても豊富に用意されている。他の科目・校種の免許を取る（副免）ための勉強もできるようになっている。

③「山梨大学で教員養成をしている」について

本学の教育学部・教職大学院で学んでいる良さ・意義を・意義を実感できるように保障したい。山梨大学教育学部のルーツは、「徽典館」である。江戸時代の甲府学問所をルーツとして、明治時代には山梨の師範学校がおかれ、以来ずっと山梨の教員養成を担い続けている。

我々はそれをこれからも継承し、大事にしていきたい。とりわけ山梨大学教育学部と教職大学院の特色としては、手厚さ、少人数教育である。教員と学生の距離が近く支援がとても手厚い。教員採用試験のための対策講座も手厚い。教育現場との近さも特色の1つであり、教育ボランティア活動、地域学習アシストといった活動、附属学校園がすぐ近くある点も他の大学にはない特色である。

続いて、意見交換が行われました。領域別に学生から質問や意見を募り、学部長や関係教員が返答しました。授業、研究支援、就職支援などについて多くの意見がありました。いくつかを紹介すると、「学年・学科の異なる人との意見交換の場がほしい」、「開講されない授業を改善してほしい」、「現場との連携を密にして研究環境を整えてほしい」、「教職支援室が充実しているので利用を勧めたい」などです。学生代表のみなさんから多くの貴重なご意見をいただき、教育学部・教職大学院の教育研究環境を改善するための活発な議論ができました。ご参加いただいた学生、教職員の方々に心より感謝申しあげます。

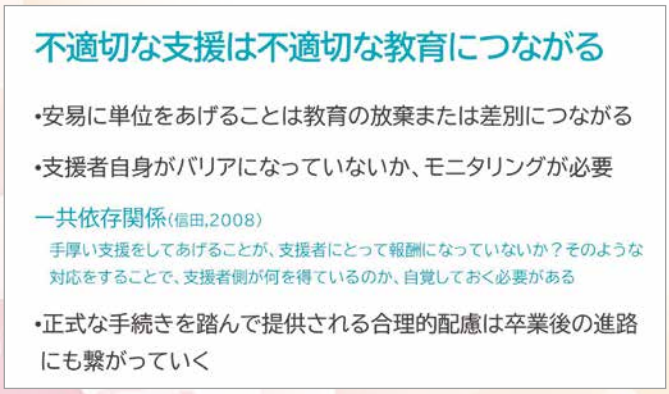
FD委員会副委員長　**吉井 勘人**

FD研修会

第1回 FD研修会

「合理的配慮の必要な学生への支援のあり方について
精神障がい学生の合理的配慮」

正木 啓子



2024年４月から、「障害者差別解消法」が改正され、私立大学（事業者）において「合理的配慮の提供」が「努力義務」から「義務」に変更されます。国立大学法人である山梨大学は、これにより一層の理解と対応が求められています。特に精神障がいは、高等教育機関の障がい学生の中で最も多く、その対応は個別性が高く難しさがあります。そこで、本研修では、精神障がい学生への合理的配慮に焦点を当て、以下の３点について説明を行いました。①学生と教職員・大学が協力し合い建設的対話を行い、本人の意思決定を尊重し合意形成を行うことが重要。②成績評価においてはダブルスタンダードを避ける。③個人情報は本人の許可なく第三者に漏らさず必要な場合は本人に説明し、慎重な取り扱いが求められる。また、これらに加え、支援においては共依存関係にも注意が必要であり、支援者自身がバリアになっていないかをモニタリングする必要があることにも言及しました。

第2回 FD研修会
「附属4校園との連携による教員養成・教育実践研究協議会の取組」

中込　司

附属学校園の教員養成・研修機能強化の課題として、その在り方や役割の見直し、大学との連携、地域との連携、成果の還元が指摘されています。

それらを受け、第四期中期目標では、附属学校園が実践的な実習研修の場を提供するとともに、先導的な教育モデルを開発し、その成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指すとしています。その目標達成に向け、ＩＣＴを活用した教育モデルの開発を始め、県内学校園への教員派遣とともに、研修会の開催や教育実践事例集の配付を行っています。

本協議会は、研究開発、実習・養成・育成研修、地域支援連携の三領域で構成されています。運営にあたっては教育実践総合センターを中心に取組を進めるとともに、幼小接続・ＩＣＴ教育推進・共同研究・教員研修の４ＷＧにおいて具体的な実践研究を進めています。いずれのＷＧも大学教員と連携し、研究推進・成果の発信を行っています。

今後も、中期計画の評価指標達成に向け、皆様のご理解ご協力をお願いいたします。

第3回 FD研修会
「教員養成学部で学ぶ SDGs」

鴨川 明子

第３回ＦＤ研修会は、「ＳＤＧｓに関連する学校教育、大学教育の取組の現状を説明し、教員養成における課題と可能性について考える機会」となるよう実施しました。

まず、ＳＤＧｓの目標４「質の高い教育をみんなに」を中心に、国際社会の動向を概説した後に、山梨大学における身近な取組「梨大みんなのＳＤＧｓ!」をご紹介しました。

続いて、学校において、本年度検定に合格したばかりの未来の教科書の中でＳＤＧｓがどのように扱われるか、現行の教科書と比較しながら説明しました。また、学校と地域とのパートナーシップを築く事例として「避難所できもだめし」も取り上げました。

最後に、「教員養成×ＳＤＧｓ―課題と可能性」と題し、ＳＤＧｓに関する学びを通じて、教師に求められる多様な強みと専門性の一つである「グローバル感覚」を学生が身につけると、ローカルな課題への感度が高まるのではというメッセージをお伝えしたところ、「グローバルな現象を学生がどのように自分事としてとらえることができるか」という重要な質問をいただきました。

第4回 FD研修会
「初年次学校園体験活動について」

高橋 英児

2024年２月に試行する初年次学校園体験活動のねらい・内容と今後の課題などについて報告を行いました。初年次学校園体験活動は、１年生を対象とした活動で、２年次に履修する観察実習ならびに３年次に履修する教育実習の一部として開講するもので、2024年度から必修化の予定となっています。

活動は、附属小学校または中学校で業間休みを含む連続した２時間を参観し、その後大学に戻って観察したことについてのリフレクションを行い、気付きや発見をまとめるという構成になっており、①次年度・次々年度の観察実習・教育実習に先立って、児童・生徒の生活に関して具体的なイメージをつかむこと、加えて、大学におけるふりかえりから得られた知見を土台に、②大学での学習・研究に対する課題を明確化すること、を目指しています。

本活動は、活動の過程で内容を見直し、修正しながら改善を図っていく必要があります。この取り組みは、多くの先生方のお力が必要です。今後ともどうかご理解とご協力をお願い申し上げます。

附属学校園での研修報告

障害児教育講座　川池 順也

初任者研修では、長く特別支援学校で教員として勤めていたこともあり、附属特別支援学校にて研修に臨ませて頂きました。

研修当日は気温も上がり、担当させて頂いた中学部の生徒の皆さんは、コロナ明け久しぶりのプールでの授業に臨むことができることに嬉しそうな表情をみせており、私まで幸せな気持ちになりました。とはいえ、教員も生徒もプールでの授業では、徹底した生徒個々の健康管理と入水への安全確認を怠ってはなりません。生徒を支援する教員団の一人として、緊張感をもって重要な役割である「おか番」を担いました。学習活動中には、「体調に変化の兆しがある生徒はいないか」「プールサイドで太陽光で熱くなっている箇所はないか」を確認し、休憩時間には指差しと目視で、「溺れている生徒はいないか」「落下物はないか」を確認しました。次にデジタルカメラを手渡され、生徒の活動の様子を撮るように指示を受け、一人ひとりの生徒が意欲的に活動に臨んでいる様子を撮っていきました。プールの底に落とされたボールを一つ一つ丁寧に取っていく生徒、友達との水中歩きを競って楽しんでいる生徒など、久しぶりのプール活動を存分に味わっているように窺えました。私自身は時間軸を1年前に戻されたような感覚で研修に臨ませて頂きました。ありがとうございました。

生活社会教育講座　菅沼 博子

2023年４月に本学に着任し、同年６月30日に初任者研修のため、附属中学校にお世話になりました。

附属中学校では、米山卓先生による、３年生の社会科の授業を見学いたしました。第二次大戦を経て、日本の社会がどのように変化したのかという内容について、生徒の問題関心を喚起する問いを投げかけながら授業が展開されていました。グループ討議を行ったり、生徒にとって身近な事例なども取り上げるなどしながら、単元の内容について、生徒に主体的な学びを促す授業進行が印象的でした。

授業見学後は、副校長の萩原喜成先生から校舎内をご案内いただき、校長室で質疑に応じていただきました。私が中学校を卒業したのはおよそ20年前のことですが、20年前に生徒として当たり前のように享受していた授業の陰に先生の創意工夫が詰まっていたことに気づかされました。また、ＩＣＴ教育への取り組みや教員の働き方改革などをはじめとして、時代とともに変化する学校教育と教育現場の最新の課題に、附属中学校の先生方が積極的に取り組んでいらっしゃる姿に感銘を受けました。

芸術身体教育講座　堀口　文

2023年４月に本学に着任し、初任者研修として６月29日に附属幼稚園にお世話になりました。私の専門は幼児教育ではなく保健体育ですが、幼児期の発育発達にも興味があり、附属幼稚園での研修を希望いたしました。当日は、副園長である古屋あゆみ先生より施設をご紹介いただき、附属幼稚園の特徴や理念についてご説明いただきました。その後は５歳児クラスの活動に参加しました。

園庭には、ブランコ、滑り台、登り棒の他、木とタイヤを組み合わせて作られたオリジナルのジャングルジムのようなものもありました。そういった遊具以外にも園庭内に小さな丘が作られており、遊びながら様々な運動が経験できる工夫が見られました。自由時間には、半数近くの子どもが園庭に走りだし、私も誘われるがまま一緒に鬼ごっこをしました。その最中にも、登り棒や木に登ったり、丘を登り降りしたりする姿が見られ、楽しみながら知らず知らずのうちに多様な運動経験をしている様子を間近で観察できました。また、夢中で動き回る子どもたちの姿を見て、本来人間には運動欲求が備わっているのだということを改めて感じる一コマでもありました。

１日かけて子どもたちと共に活動することで、教育において大切なことは何かを改めて考える機会となり、多くの気づきを得ることができた研修でした。受け入れてくださった研修先の附属幼稚園の方々にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

編集後記

慣れない編集作業に苦闘しつつも、第41号の完成になんとかこぎつけました。ご寄稿等でご協力いただいた多くの方々に深謝いたします。年間のＦＤ活動を振り返るとあらためて様々な取り組みを思い起こすとともに、今後も真摯に継続しなければならない思いに至ります。